

93『公民館のしあさって』に去来する、様々な想い?!

堂本 彰夫

(1)突然来た、「書評」依頼！そのこと自体は複雑であるが、とにかく彼らには、是非頑張って欲しい！

思いもしなかった「書評」依頼が、このほどあった！本当に、突然である！最近、ほとんど交流もなく、活躍の方は、マスコミ等を通じて知ってはいたが、まさか当人からの電話があらうとは！その電話の主とは、社会教育、とりわけ公民館関係者にあつては、今や全国的に著名となっている、沖縄県那覇市の「繁多川公民館」（現在、NPO法人「1万人井戸端会議」が指定管理受託中）、その館長（同法人の代表？）の南信之介さん（「君」の方がよいか？）であつた！そして、その用件は、今般自分達が刊行した本『公民館のしあさって』の書評を、私に、是非お願いしたいということであつた！

一瞬たじろぎ、どうするか迷ったりもしたが、とにかく、その公民館の活躍は知っていたし（同じく、同市の「若狭公民館」とともに！）、特に、今回の、本の刊行の直接的なきっかけとなっている、一時期私の学生？でもあつた、エジプトのモハメッド・アブデルミギードさん達とのコラボ本であるということで、そのこと自体は複雑ではあつたが、引き受けることとなつたわけである（その後、「書評」の掲載は、これも、私にとっては、かなり複雑な思いを抱かせる？地元新聞社のR社となつた！既に原稿は送っているが、掲載はまだのようではある！）！

ここで、多少説明を加えると、上記ミギードさん（愛称！ただし、当時私達は、さらに縮めて「ギドさん」と呼んでいた！）は、ある時期琉球大学の学生であり、私の研究室にも出入りし、当時のゼミ活動にも積極的に参加していた若者？であるので、今回の書評は、断るにも断れなかつたということであるが、その彼が、ある意味私の知らない？間に、繁多川公民館の南さん達と懇意になり、現在では、彼らの協力の下、驚くなかれ、自国エジプトに、日本の「公民館」のようなもの（「ター公民館」）を創り上げている！そしてまた、そこには、世界的なネットワークとして、「グローバル公民館」というようなものも立ち上がっているということである！

ということで、今、改めて、大変申し訳なく思い出すが、当時の私は、彼の思いに、ほとんど寄り添ってゐなかつたということ、そして、その後の彼の生活等にも、あまり頓着してゐなかつたということである（その時のギドさんの願いとか、学外での活動については、彼の大学院入学が、入試方法の問題で、他の学部となつたこともあり、知ることもなかつた！また、知ろうともしてゐなかつた？今回の本で、当時の、彼の経験や思いが初めて分かつた次第でもある！）?!その頃の私は、今更言い訳がましいが、正直、それどころではなかつたということでもある?!

しかるに、この間、そのギドさんや南さんとは、ほとんど行き来はなかつたのであるが、そのギドさんが、確か6年前？に沖縄を離れる際に（奥さんは沖縄の人）、一度、私の研究室に顔を見せてくれたことは覚えている！ただ単に、別れの挨拶を交わしたに過ぎなかつたように記憶しているが（しかし、その時、エジプトの土産品？もいただいている！現在、目立ってはいないが、私の机の上の一角に横たえてある！）、その後、よもやそこから、そうした大それた？動きが出てこようとは、その時には、夢にも思つてゐなかつたわけである！ただ、その後、確か一度、繁多川公民館に行き、その関係の集まり（関連のセミナー？）に参加させてもらつてはいた！

(2)改めて、その本は、どういう本なのか？一言でいえば、「面白くて、ためになる！」ということである！

いずれにしても、ここでは、そうした経緯は、この辺で終わりにするが、とにかく、まずはその本が、どういう本なのか？やはり、そこが重要であることは言うまでもない！上記のような複雑な思いも持ちながらではあるが、一言でいえば、お世辞抜きで、「面白くて、ためになる！」そういうことである！しかし、鍵（肝）は、そのことが、本のタイトル『公民館のしあさって』と、どう関係しているのかでもある?!つまり、その「しあさって」という表現に、私自身、正直驚かされたのであるが、軽いのか？重たいのか？あるいはエンタメ本なのか？はたまた、啓発書なのか？何とも悩ましいタイトルとは言えるのである?!くどいようだが、よくある「あした」でもない、さらには「あさって」でもない！何と、その次の日の「しあさって」ということなのである！

ただし、折角でもあるから、ここでは、本に紹介されている「繁多川公民館」について、多少触れておきたい！とにかく、南さんの親切な案内（文と写真とイラスト）があり、施設・事業・スタッフ、そして、その使用・利用状況（方法）、さらには、その歴史も含めて、本当に「リアルに」分かるものとなっている（スタッフの一言等の挿入も効果的！）！しかも、そこには、当該地区（繁多川地域）のこと、その地域の人達（子ども・若者達も含めて！）との関係づくり等も、よく分かるものとなっている（単純に、「ノウハウ」というようなことを超えている！それがあるからこそ、同公民館の今があるとも言えるであろう！）！

なお、「繁多川公民館」は、1階が図書館、2階が公民館の、いわゆる「複合館」であり、那覇市の7つの条例公民館の一つである（同市の、否、県内初の「指定管理公民館」でもある。ちなみに、当初の指定管理団体は、NPO法人「なはまちづくりネット」であつた。）。ユニークで、著名な事業としては、「繁多川地域計画／あたいぐわー（屋敷内の菜園）プロジェクト／ジュニアボランティア／すぐりむん（すぐれた人物）認定」等があり、それらのことも詳しく紹介されてもいる！

そこで、改めて、その表現に込められた思いとは何なのか？そこが、この本の鍵（肝）ということであるが、まずは、「地域」には、こういう場所（言い換えれば、いわゆる「三間」？）があり、そこで、人と人とが出会い、学び、そして、つながる／広がる活動が生まれている！そういうことを、「力まず」「楽しく」紹介してくれているということである（おそらく、みなさんも、この本を読まれると、そのことを大いに感じられるであろう?!）！

しかしながら、その「面白くて、ためになる」要素は、間違いなく、この後に続く、彼も含めた？異色の執筆陣による論文／対談等にある（かなりの情報収集と知識が投入されている!）！館長の南さん、ミギードさん夫妻、某県外大学の教授二人（Mさん／Sさん）、O大学非常勤教師のEさん（在沖エジプト人）、民間人Nさん（タウンキッチン取締役他）、Yさん／Tさん／Nさん（ツバメアーキテツ／建築設計事務所）、そして、何故か？「（沖縄の）共同売店」（愛と希望の共同売店プロジェクト）のスタッフ（Kさん／Yさん）であるが、彼らが、この本の著者ということでもある！その名も、「公民館のしあさって出版委員会」である！

残念ながら、ここでは、これ以上の紹介は出来ないが、伝えたいことは、何故、そうした多種多彩な人達が結ばれているのか？その出会いは、きっかけは？そして、そこに横たわる共有の思いとは？ということであるが、このような多種多彩な人達の出会（偶然ではあろうが、ある意味必然でもあったと言えるかもしれない？）と深い思い、そしてネットワーク力が、時代（次代）を創り出していつているということである！しかも、このことは、直接的には不要であろうが、私には、もう一つ、特別な感情も抱かせている？それは、そこには、あの「おきなわ」がもつ「怨念？」、あるいは必要以上の「礼賛？」もないということである?!それが、私には清々しく、そのために、確かな「未来」を感じさせてくれるのでもある?!

(3) 改めて、彼らは、どんなことを主張？しようとしているのか？

ところで、ここでは、エジプトの「ミギードさん」のこと、それに関わる「ター公民館」や「グローバル公民館」のことは、多少なりとも、具体的に触れておかなければならない！それがなければ、本書もなかったわけである！そこでまず、「ミギードさん」達の「ター公民館」（「ター」というのは、日本の公民館の「集う→学ぶ→結ぶ（つどう・まなぶ・つなぐ）」に「協力・実現」を加えたコンセプトで、アラビア語の「ター」で始まる5つの語の頭文字から考え出されたもの!）は、「EDU-Port」（文部科学省による「日本型教育の海外展開」を推進する事業。彼らは、2019～2020 年度に、エジプトに公民館を作ろうということで、その公認プロジェクトに選定された。）の公認プロジェクト、そして、2021～2022 年度の、JICA（国際協力機構）採択の「草の根技術協力事業（日本における日本式公民館普及と社会教育強化プロジェクト）」の一環で立ち上げられたという（そこに、南さん達の協力があつたわけである!）！また、「グローバル公民館」とは、「世界に社会教育や公民館を届ける活動。まずは、沖縄とエジプトを結ぶオンライン講座として開講。今、活動の幅をどんどん世界に拡がっている」ということである！

余談ではあるが、こうした日本型の教育の魅力（意義・メリット）は、私は、以前から厳然と存在すると思っていた（明治期以降の西欧コンプレックス?のために、その「後進性」ばかりが主張されてきた?例えば、「我がまちの学校／地域の文化センターとしての学校?細かいところでは、部活動等?）?!自分達の地域の公民館「ホーム公民館」とか、1990 年代の「生涯学習まちづくり事業」等も、その一つであつたと考えている（事実?幾つかの国、地域の人達が、視察等に訪れてきていた?!そういうことを耳にしたことがある!）！ひょっとしたら、現在、ユネスコが主導している「（持続可能な）学習都市 learning cities」（実践）にも、その影響を与えているのではないだろうか（その特徴は、いわゆる「フォーマル教育」と「ノンフォーマル教育」の融合?というところにあると受け止めているが、それは、まさしく、私が唱えてきている「教育協働」の理念／目標と軌を一にしていると自負している?）?!

最後に、彼らは、改めて、どのようなことを主張しようとしているのか?ということであるが、正直、今の、この私が、それを余すことなく咀嚼し、多くのみなさん達に伝えることはできないし、そもそも、そのこと自体が烏滸がましい（ある意味、恥ずかしい?）のであるが、少なくとも私から、これだけは伝えなければならぬと思うことは、やはり、ここにあるNPO法人（指定管理者）のことである!「直営」がよいのか、NPO 法人等による「指定管理制」がよいのか?そうした議論もあるであろうが、「定期的な人事異動がない」「思いのある、やる気のある人が頑張れる」「しかし、その指定の保障はない」「スタッフの生活の維持には潜在的なリスクがある」、そういう中での推移ということで、ここでは、行政の意識（覚悟?）が、一方で問われるということでもある（ここでは詳しく示せないが、これまでの「教育協働への道」を読んでいただければ、そのことは分かる?）

彼らが、いみじくも「しあさって」と表現した背景には、その実現は、かなり難しい?少なくとも、今の状態では、なかなか厳しい?そうした思い（現状分析）であると思うが（若干の揶揄も含まれている?）、「今」の蓄積（成果）が「明日」を創り、その「明日」の蓄積（成果）が「明後日」を創るということであれば、その「しあさって（明々後日）」は、ほんの次の日でもある?!決して、実現不可能なのではないのである?!「日本から公民館が来るのならば、win-win の関係でなければ継続していかない」（ミギードさん）、「長らく停滞して久しい日本の社会教育や公民館とそれらを取巻く状況に小さなイノベーションを巻き起こしていきたい」（編集委員会）、そんな思いと呼びかけが、この本のメッセージである!ただ、その未来?を、私自身が見ることが出来るのかどうか??そんなことさえ、思う次第でもある?!とにかく、頑張れ、（繁多川）公民館、思いをもった人達!